谷崎潤一郎と戦争

――芸術的抵抗の神話――

細江　光

谷崎潤一郎は、第二次大戦中、国家権力による弾圧を受けながら、『細雪』を書き続けた為、谷崎は《戦争と戦争政治にたいする不同意をこの作品に託したので、作者の非協力と逃避の文字のうらにこそ、言外の抵抗がつらぬかれていたのであろう》（黒田秀俊『知識人・言論弾圧の記録』白石書店、S51年刊）などと評されるようになった。が、果して谷崎は、本当に反戦と芸術的抵抗を貫いた作家なのであろうか。日本の敗戦からちょうど五十年の節目を迎えるこの機会に、谷崎の戦争観を再検討し、併せて『細雪』の意味についても問い直して見たい。

一、日清日露戦争から日中戦争まで

谷崎が最初に経験した戦争は、数え年九歳の時の日清戦争である。『幼少時代』（S30～31）によると、幼い谷崎には戦争の理由はよく呑み込めなかった。しかし、『老いのくりこと』（S30）によれば、中国人を「チャンチャン」又は「チャンチャン坊主」と蔑称した事は、彼も例外ではなかった。

谷崎少年は以前から武者絵が好きで、よく学校の休憩時間に石盤に描いていたが、《日清戦争になつてからは、専ら戦争画に興味を感じて、軍艦の種類や、軍

服の階級別等に注意を払ひ、それらを細かく画き分けるのが楽しみであつた》と言う。少年は毎日の様に絵双紙屋の店の前に立って、三枚続きの戦争の錦絵に眼を輝かして見惚れていた。中でも《成歓の役に勇名を馳せた喇叭卒白神源次郎の戦死の図、原田重吉の玄武門の門破り》等々は、『幼少時代』執筆当時、七十前後の谷崎の記憶にも残っていた程である。少年は、絵双紙屋の《店先で図柄を覚え込んで来ては、熱心にその真似をして描いた》と言う。『春風秋雨録』（M36）では、《われ幼きより、最も嫌ひしは軍人にて（中略）たとへ名声を世界にふるひ、功名を天下にたつとも、他人の生命を奪ひ、刃をふるひて血を流すは、これをしも人の道にかなへりとやいはむ》と述べた谷崎だが、自分がなるのでない限りは、必ずしも常に軍人を嫌った訳ではなかったらしい。

明治三十一年には、阪本小学校の回覧雑誌「学生倶楽部」に、黄海海戦での日本の勝利などを描いた『学生の夢』の他、『楠公論』『桜井駅』を寄稿し、一中入学後も、三十四年の「学友会雑誌」に漢詩『護良王』、三十五年には藤田東湖の「和文天祥正気歌」を引用した『道徳的観念と美的観念』や「小（ママ）島高徳桜樹に題する図に」と題した歌を載せるなど、忠君愛国の傾向も既に現われていた。また、三十六年の『無題録』で、《吾人の愛する所は雄偉の筆を以て物したる悲痛なる文字なりとす。》として、Thomas Campbell の "The Downfall of Poland" を引いているのは、民族主義への共感という点で注目される。

日露戦争開戦時には、谷崎は数え年十九歳、中学四年になっていたが、『シンガポール陥落に際して』（S17）によると、《毎朝日比谷の第一中学校へ通ふ途中、当時銀座尾張町の四つ角にあつた某新聞社の楼上高く掲示される号外の記事を読んでは血を沸き立たした》。分けても国交断絶後の最初の海戦でロシア軍艦二隻撃滅の報を読んだ時、それから奉天の会戦、日本海々戦の時の《国民的感激》は、昭和十七年になっても忘れられないと述べている。また、『直木君の歴史小説について』（S8～9）でも、《嘗て日露戦争の時、「此の日天気晴朗なれども浪高し」「殆んど舷々相摩せ

んとするが如くに」と云ふやうな海軍公報の文章が有名になつたことがあつたが、われ〳〵日本人はあゝ云ふ豪壮な戦争の記述を読むと、いつでも血湧き、肉躍るのである。》と述べている。

明治三十七年十二月の「学友会雑誌」に載った谷崎の『春期撃剣部小会記事』には、《撃剣は是れ実に我大和民族の固有せる武術、須く世界に向つて誇称すべき也。況んや目下の時局に際し、彼の広瀬中佐によつて本邦の武術の真価の世界に発揮せられたる今日に於てをや。》とある。しかし、谷崎の日露戦争観を最もよく伝えているのは、同じ時に「学友会雑誌」に載った新体詩『起てよ、亜細亜』であろう。

《聴け、悪虐の罪の声、黒竜江の血の流れ、実に大神も怒ります、権威に誇る白人が、／かよわき民の血をすゝり毒の剣を振ふ時、欧亜の土を撼し、成吉思汗の霊いかん。』（中略）黄金の財殖やすには賢しき支那の商人よ／汝利欲の念をすてゝこゝに社稷を顧みよ／威海衛上ひるがへる旗のしるしを如何にみる／膠州湾辺たゞよへる艦を何国のものと観る。（中略）見よや日出づる東の方光充満たる大八洲国／高天原におはします神の仰をかしこみて／亜細亜の救世主、神の御子すめら大君太刀とりて／文明の仇、世界の敵、蛮露を討てと起ちたまふ。／兵馬堂々海をこえて再おこる神の軍（中略）あゝ勇しき扶桑国の日本男児の様にならひて／一人も余さず皆奮ひ起て亜細亜の蒼生八億余万。』》

帝国主義的な悪しき白人、個人主義的で国家を顧みない中国人、アジアの救世主日本――素朴な正義感と英雄崇拝に裏付けられたこの図式が、谷崎の脳裏に意外に深く刻み込まれていた事を、我々は後に確認する事になるだろう。

しかし、作家デビューした谷崎は、間もなく西洋の文学と文明に心酔するようになった為、彼の文章に反西洋的な言辞が姿を現わす事は、長らくなかった。第一次大戦時には、非難・賛美、いずれの反応も示していない。その谷崎が日本回帰し、反西洋的になって行くのは、もとより彼の内的必然性に関西移住などの外的偶然が加わった結果であるが、その外的要因の一つ

には、アメリカの排日移民法案もあったように思われる。[1]

谷崎は、大正九年十二月の『其の歓びを感謝せざるを得ない』では、チャップリンの喜劇からは《若々しい元気と活力とに充ち溢れた亜米利加の国民性》が分り、壮快な気分になると述べ、大正十二年一月の『アヹ・マリア』では、アメリカ映画に関して、《あれらの眼の眩むやうな絢爛なフイルムは》、アメリカの《富の力が作り出す偉大な夢だ。》と賞賛していた。それが、大正十三年五月に排日移民法が成立して僅か三ヶ月後の『洋食の話』では、洋食は不味く、英米人の洋食のテーブル・マナーは特にうるさ過ぎると批判し、同年十一月の『映画化された「本牧夜話」』では、日米両国の映画の悪口を言った挙句に、《亜米利加物は日本物より優れてゐるし、見た眼が面白いことは事実であるが、標準を高くして云へば傑作と云ふものは案外少い。だから其奴を無批判で受け入れ、それにかぶれるのは宜しくない。日本には日本で芸術の伝統があるのだから、映画に於いても寧ろその方を開拓すべきだ》と述べている。翌大正十四年十一月の『西洋と日本の舞踊』では、《盲目的な西洋芸術崇拝の弊》を言い、アメリカのデニ・ショウン一座など寄席芸に過ぎないとして、石井漠兄妹の舞踊を絶賛する。また、大正十五年二月の『一と房の髪』では、第一次大戦後、《亜米利加人と英吉利人が外の外人を追ひ払つて、東洋の商権を独占するやうになつてから（中略）彼等は同じ西洋人でも、アングロサクソン人種でなければ、自分等の仲間でないどころか、野蛮人であるかのやうに扱ふ》と、作中人物が、その《狭量な、不愉快な気風》を非難する。さらに後年の『懶惰の説』（S5）になると、《清潔と整頓とを文化の第一条件とする》《アメリカ人は鼻の穴から臀の穴まで、舐めてもいゝやうにキレイに掃除をし、垂れる糞までが麝香のやうな匂を放つやうにしなければ、真の文明人ではないと云ひだすかも知れない。》などと揶揄するまでになっていた。谷崎がレニングラードの出版社プリボイに宛てた昭和四年頃の書簡で、『痴人の愛』はアメリカかぶれ批判だと説明しているのも、こうした反米感情を執筆

当時に遡って投影した結果であろう。[2]

右に挙げたものは、主に文化面についての非難であったが、『上海交遊記』（T15）になると、大分きな臭いものになって来る。

大正十五年一月、上海を訪れた谷崎は、田漢及び郭沫若から次の様な訴えを聞かされる。

《われ〳〵の国の古い文化は、目下西洋の文化のために次第に駆逐されつゝある。（中略）外国の資本が流入して来て、うまい汁はみんな彼等に吸はれてしまふ。（中略）上海は殷賑な都会だとは云へ、そこの富力と実権とを握つてゐる者は外国人だ。》

それに対して谷崎は、《外国の資本と云つても主に亜米利加と英吉利の金で、此れも世界中を席巻してゐる。》《日本にしたつてアングロサクソンの金力に支配されてゐるだらう。詰まり世界ぢゆうが、彼等にうまい汁を吸はれてゐる訳で、苦しんでゐるのは支那ばかりではないかも知れない。》と慰めている。この様に、『上海交遊記』の谷崎は反英米的であり、同時に中国に対しては同情的であった。

谷崎は、大正十五年一月の『為介の話』で、《直隷派と反直隷派、張作霖と呉佩孚の関係》を主人公に解説させており、直隷派の背後に英米が、反直隷派の背後に日本があって、中国での権益を巡って鎬を削っていた事実も、恐らくは知っていたであろう。しかし、谷崎は、英米の帝国主義は批判しても、日本がアジアに対して行なう侵略・搾取は、正当ないしは必要やむを得ざる事と見なしていたらしい。そしてその事が、親中国的であった谷崎に、満州事変以降の日本の侵略戦争を肯定させる事になるのである。

谷崎はこの後、西洋的なものを低く評価し、日本的なものを称揚する発言を繰り返して行く。[3] 例えば『饒舌録』（S2）では、西洋の文脈が入って来る事によって、《現在の日本文は非常に煩はしい醜いものになつた。》と書いているし、『現代口語文の欠点について』（S4）でも、学校文法に関して、《明治年間は何事につけても西洋文物の模倣時代であつたから、文法迄が英語や仏語の直訳に終つたのは是非もないけれども、私たちの習つたやうな文法が今も教へられてゐるのだ

としたら、全く有害にして無益なものである。（中略）もう今日は独創的な国文法がおこなはれてゐてもい、頃である。》《国語の伝統的精神を発揚することは、東洋思想を尊重することである。徒らに左傾思想の取り締まりをするよりは、此の方がずつと有効ではないか。》などと述べている。

こうした考えの延長線上に書かれたのが、『文章読本』（S9）であるが、その第一章では、日本語の語彙が乏しいのは寡黙な国民性によるとして、次の様な例を挙げている。

《我等日本人は戦争には強いが、いつも外交の談判になると、訥弁のために引けを取ります。国際連盟の会議でも、しば〳〵日本の外交官は支那の外交官に云ひまくられる。われ〳〵の方に正当な理由が十二分にありながら、各国の代表は支那人の弁舌に迷はされて、彼の方へ同情する。》

満州事変・満州国建国・国際連盟脱退という一連の事件について、谷崎が日本の正当性を信じ切っていた事が良く判る。

さらに、『職業として見た文学について』（S10）になると、《われ〳〵の国語は外国語に翻訳するのが困難であるから、世界の読者を顧客に持つことはむづかしいとは云ふもの、、我が帝国の隆盛と、殖民地若しくは保護国の繁栄とを思ふ時、日本文化の光被する範囲もだん〳〵広くなりつゝある。斯く考へて来れば、小説家稼業は今後大いに発展の余地があり、我が国運の消長と運命を共にするものと云》えると、領土拡張主義的な発言が飛び出すまでになる。

谷崎は、満州事変以後の国粋主義的な動きもむしろ歓迎していたらしく、昭和七年にファシズム宣言をした直木三十五に対しても好意的だった。『直木君の歴史小説について』（S8～9）では、《最近、ファッシズムの抬頭と共に国粋主義を口にする者が漸く多く、国文学の古典を再び新しい眼で見直さうとする傾向が見え出して、若い作家たちも以前のやうに歴史に冷淡ではなくなつて来たらしく、もはや直木君の慨歎する程ではないかも知れない》と述べている。思えば谷崎は、『饒舌録』で既に、《立憲政治とか代議政体とか云

ふやうなもの》が《果して日本の国民性に合致した政体であるかどうか》と疑問を投げ掛けていたのである。[4]

『初昔』には、昭和十一年十月、五・一五事件に連座して服役中の愛郷塾主・橘孝三郎が、危篤の母に最後の別れに行き、《お前がお国のために尽してゐるなら何を云ふことがありませう》と言われたという記事を見て、貰い泣きをしそうになった事が出ているが、谷崎は橘の農本主義的ファシズム思想にも同情的だった可能性がある。『東京をおもふ』（S9）の最後で谷崎は、《われ〳〵の国の固有の伝統と文明とは、東京よりも却つて諸君の郷土に於いて発見される。（中略）東京は西洋人に見せるための玄関であつて、我が帝国を今日あらしめた偉大な力は、諸君の郷土に存するのだ。》と読者に呼び掛けているからである。こうした郷土主義的な考え方は、『友田と松永の話』（T15）あたりから表面化し、『蓼喰ふ虫』（S3～4）や『吉野葛』（S6）は、その流れの中で産み出されたものだった。

この時期にはまた、少年時代以来の天皇崇拝の傾向が、作品の中にまで顔を覗かせ始め、『乱菊物語』（S5）『吉野葛』[5]では後南朝の史実を取り上げ、『蘆刈』（S7）では後鳥羽院を追慕している。谷崎の助手をしていた江田治江は、昭和五年八月末の或る夜、谷崎が書斎の灯りを消して月の光を浴びながら、菅原道真さながらに紫の衣を両手に捧げ持って、皇居を遥拝しているのを目撃した。谷崎は宮仕えをしていた伯母が拝領したこの紫衣を貰い受け、大切にしていたし、皇居について語る時には、「瑞雲棚引く千代田城の目出度さは申すも畏れ多いことながら」といった調子だったと言う（高木治江『谷崎家の思い出』）。『細雪』にも、《勿体なくも天子様のお膝元へ移住すると云ふのに》（上巻二十一）とか、《瑞雲棚引く千代田城のめでたさは申すも畏いこと、して》（中巻十四）などの表現が使われたり、シュトルツ父子と雪子と悦子が二重橋で最敬礼する場面（中巻十四）が出て来たりする。

この頃の谷崎はまた、軍艦にも関心を示していて、確認できるものだけでも昭和五年十月、十一年十月の

二度、観艦式を見に行き、昭和十一年の時には、軍艦に乗船させて貰った事を、十月三十一日付けの佐藤豊太郎宛書簡で報告している。

『乱菊物語』から『吉野葛』『盲目物語』『武州公秘話』『顔世』『聞書抄』と、谷崎が乱世の武将を好んで取り上げるようになるのも昭和五年から十年に掛けての事、戦国の武将谷崎忠右衛門に谷崎家のルーツを求めた『私の姓のこと』も、昭和四年の文章である。

一一、日中戦争から太平洋戦争へ

それでは、昭和十二年七月七日から始まった日中戦争に対する谷崎の反応はどうか。

『谷崎潤一郎家集』（S52）には、《南京陥落の日》と題した歌《南京の城おちゐると聞きながら宇治十帖をひもときてありぬ》と、《昭和十三年元旦》と題した歌《みいくさは南に北に勝つといふつちのえ寅の春を迎ふる》が収められている。そして昭和十二年十二月二十四日付け松子宛書簡には、小学生の娘・恵美子が学校へ提出する書初めの文句について、《時節柄「帝国万歳」などはいかゞでムいます。》と書き送っている。日中戦争を日本の侵略戦争とする考えなどは、微塵もなかったのである。

この当時、谷崎は『源氏物語』現代語訳に従事していて、その下訳が完成に近付いていたが、中央公論社の意見により、その出版は時局平定まで見合わせる事になった。谷崎は昭和十二年十二月十八日付け土屋計左右宛書簡の中で、その事に触れた上で、《尤も東洋文化発揚の意義が認められて来た時勢ですから、戦争さへ済めば前より一層有望と云ふ訳です》と付け加えている。

同様の考えは、昭和十四年一月に刊行された『潤一郎訳源氏物語』巻一序の、次の様な一節にも窺われる。《顧れば、足かけ四年前に私が筆を執り始めた頃とは、社会の状勢が著しく変り、今や我が国は上下協力して東亜再建の事業に邁進しつゝある。かう云ふ時代に、われ〳〵が敢て世界に誇るに足ると信ずるところの、われ〳〵の偉大なる古典文学の結晶を改めて現代に紹

介することになつたのも、何かの機縁であるかも知れない。[6]》

国粋主義歓迎は、この頃の谷崎の一貫した態度なのである。

昭和十三年四月、モルガンお雪の帰国が新聞紙上を賑わすが、その際、谷崎は喜びの余り涙が止まらなかった事を『初昔』で回想した後、次の様に続けている。

《蓋しあの当時はさつきも云ふ通り支那事変の第二年目で、国民の間に「真に日本的なるもの」を探求し愛慕する念が眼覚めつゝあり、一方反英米思想が熾烈ならんとしてゐた時代であつたから、一旦は降るアメリカに袖を濡らしたお雪が、翻然と日本人に復つて、少からぬ動産不動産の損害をも顧みず故国の懐へ飛び込んで来た行動には、大いに国民的共鳴を喚び起すものがあつた訳なので、さればこそ新聞があんなに持て囃したのでもあらう。とすると、あながち私一人が感動したのではなかつたかも知れない》（S17／7「文芸春秋」）

かつてアメリカを代表するモルガン財閥の御曹子に落籍されたお雪の帰国に、反米感情を刺激されたのは、谷崎も同じだった。幕末の横浜岩亀楼の遊女・喜遊が、金づくでアメリカ人の妾にされそうになった時、「露をだにいとふ大和の女郎花降るあめりかに袖は濡らさじ」という歌を残して自殺したという伝説を踏まえているのも、その為である。だから右の引用部分は、『初昔』が戦後初めて活字になって、新書版『全集』23巻（S33）に収録された際に削除され、現在の全集でもその儘にされているのである。

翌昭和十四年一月、谷崎は雑誌「大大阪」「皇軍に捧ぐ感謝と慰問特輯号」に、『大阪人の「声」について』を寄せている。これは『私の見た大阪及び大阪人』の一節の再録に過ぎないが、谷崎潤一郎自筆の題と署名があり、協力の意志は明らかである。

昭和十六年一月には、今春聴（東光）の『易学史』に序文を寄せて、《今は総べての東洋の古典が新しく見直されようとしてゐるのであるから、此の書は（中略）世間一般に取つても頗る時機を得た、有意義な出版であると云へる。》と述べている。もっとも、こう

した序文には、出版の意義を大袈裟に言っておかないと用紙の確保が難しかった当時の出版事情による面もあり、幾分かは割引いて考えねばならない。

昭和十六年四月十一日には、京都帝大で開催された東亜文化協議会文学部会に参加し、周作人と語り合っている。東亜文化協議会は、昭和十三年八月、日本の傀儡政権だった王克敏の中華民国臨時政府と日本政府が、日中文化提携の中心機関として設置したものである。

同年十二月八日、遂に太平洋戦争の火蓋が切って落とされた。谷崎はこの日の朝、鮎子の産んだ初孫の顔を見に病院に行こうとしていて開戦の知らせを聞き、《ちよつと偕楽園に寄り、それから直ちに九段のK病院に行つて、初めて初孫の顔を見たので、昭和十六年十二月八日と云ふ日は、二重の意味で私には忘れられない日になつた》と、現行全集所収の『初昔』にはある。しかし、ここにも先の例と同様、新書版全集以来の削除があり、初出（「文芸春秋」S17／9）では、《偕楽園へ寄つて、偕楽園主人の居間で待つてゐる間に、図らずも宣戦の詔勅の渙発を拝承し、それに関する東条首相の謹話を聞いた。座には久保田万太郎君や此の家の主人や故芥川龍之介の恩師であるところの前の東京府立第三中学校々長八田氏がをられた。私は支那料理の折包と共に異常な興奮を胸に抱いて九段のK病院に行き、初めて初孫の顔を見たので、昭和十六年十二月八日と云ふ日は、二重の意味で私には忘れられないめでたい日になつた。》（傍線細江）となっていた。谷崎はこの感激を歌に詠み、十二月十四日付けで鮎子に宛てた葉書（生誕一〇〇年記念「谷崎潤一郎・人と文学」展図録所収）に、《たゝかひを宣らせ給へる詔下りし今日ぞ初孫を見る》《偉いなる時に生れてそだち行く子のおひ先よ光りかゞよふ》と書き送った。また十二月二十日付けで小島政二郎に宛てた書簡では、鮎子の出産に関連して、《まことに本年は源氏翻訳完成に重ねて此のよろこびあり外には皇軍赫〻の捷報あり内外共に多事にて愈〻小生に取りては忘るべからざる年と相成申候》と述べている。

こうした感激と興奮をその儘に伝えてくれるのが、

『シンガポール陥落に際して』である。これは、《無敵皇軍がシンガポールを陥れたと云ふ快報を耳にして》の所感を述べたもので、この様な《国民的感激》は、普通、一生に一度あるかないかであるのに、自分は日清・日露戦争に続いて、《畏くも昨年十二月八日宣戦の大詔を拝して以来、布哇及びマレー沖の海戦に於いて、香港及びマニラの占領に於いて、更に〳〵これを経験し、今又シンガポールの陥落を聞いてこれを経験するのである》と言い、《我が日本帝国が東洋の天地に打ち立てた赫々たる偉業の跡を振り返つて見ると、蕞爾たる東海の島帝国が一度起つて老大清国を膺懲してから、遂に今回の挙を以て、香港、フイリツピン、マレー方面よりアングロサクソン人の勢力を駆逐するに至る迄、皇軍の征くところは常に公明正大であつて、欧州人の侵略史に見るが如き不正残虐の事蹟を留めないのは、真に聖戦の名に負かずと云つてよい。》とし、倭寇や豊臣秀吉・真如法親王の先例を挙げて、《我が国に依る大東亜の解放と云ふことは決して偶然でない》とする。そして《衷心より帝国の万歳を叫び》、《御稜威の下、斯くの如き輝かしい戦果を齎した皇軍の労苦に満腔の謝意を表し、貴い犠牲となつた幾多の英霊に敬弔の誠を捧げる》。そして、最後に《将来の日本人たる者は、大東亜の文化を指導し福利を増進する使命が自分達の双肩にか、つてゐることを覚悟》すべきである、と結んでいる。

この文章は、昭和十七年二月十五日、シンガポールのイギリス軍降伏を受けて、早くもその翌十六日の夜八時から、JOAKで和田アナウンサーによって朗読放送され、「文芸」三月号に再録された。進んで書かれたものである事は疑いの余地がない。《皇軍の征くところは常に公明正大であ》るという信念は、『起てよ、亜細亜』以来、全く揺らいでいない。ましてや反戦などという考えは、谷崎の頭に浮かぶべくもなかった。(7)

昭和十七年六月、日本文学報国会が設立されると、谷崎も小説部会の名誉会員として参加する。

翌七月、斎藤清二郎の『文楽首の研究』の序を執筆。その中で谷崎は、《今の時局にかう云ふ研究的にして

美術的な書籍の出版を見たことは（中略）此の未曾有の大戦に際しても一日として国粋文化の研鑽と発揚とを怠らざるわれ〳〵日本国民の、不撓不屈の精神を語るものであると云へよう。》と述べている。

同年十月一日、反高林で近くに住んでいた黒瀬隆志氏が入営する事になった。谷崎はその日、隣組の人達と一緒に日の丸の旗を振って、住吉神社か三宮まで見送った。出征兵士に対しては、いつも同じ様にして熱心に見送っていたと黒瀬氏は証言する。[8]

同年十一月十日、東京で開かれた大東亜文学者大会出席の一行を大阪に迎えて、同大会閉会式を兼ねる大東亜文学者大講演会が、日本文学報国会・朝日新聞社共同主催で、午後一時より大阪中之島中央公会堂で開かれた。翌日の「東京朝日新聞」（三）面記事には、この時、《最後に日本文学報国会谷崎潤一郎氏が示唆に富む「所懐」を述べ、壇上、聴衆席ともに渾然たる〝戦ふ文学魂〟に融けあつて講演会を終つた》とある。また、谷崎の死に際して、昭和四十年八月六日「朝日新聞」「声」欄に掲載された西尾福三郎氏（自由業・63歳）の『谷崎潤一郎氏の思い出』によれば、《吉川英治氏が熱烈な語調だったに比し、谷崎さんは和服姿で、ゆう然として国策協力を説いていた。いかにも国文出身の作家らしい自然な態度だった。》という事である。

三、『細雪』の執筆

昭和十七年という年は、『細雪』の執筆が開始された年でもある。大谷晃一の『矢部良策と創元社　ある出版人の肖像』によれば、谷崎はこの年の二月頃、創元社の和田有司を反高林に呼んで、『細雪』の出版を打診した。しかし、執筆に五年かかると聞いて創元社は辞退し、結局、中央公論社が引き受けたと言う。「中央公論」への掲載が決まるのは、この年の秋（新書版『全集』「月報19」畑中繁雄「夢魔の一時期」）、執筆開始もその頃である（座談会「細雪をめぐつて」S24／3「文学界」など）。『「細雪」回顧』（S23）などの回想によれば、何年何月にこういう事があったと年代記

風に覚書にして、粗筋も終わりまで書いておき、大体は予定通りに書けたという事であるから、作品の本質は執筆開始時点で殆ど確定していたと言って良いだろう。だとすれば、『細雪』に日中戦争や太平洋戦争に対する批判が籠められる事は、あり得ない。

また、かつて中村真一郎氏は、戦争で《亡びつつある世界を、その昨日の完全な姿のままに再現したい衝動》が『細雪』を書かせたと論じ（「文芸」S25／5「谷崎と『細雪』」）、それ以後も同種の論が幾つかあった。が、少なくとも、予言者ならぬ谷崎に、日本の敗戦や、B29が開発されて、阪神間が空襲で焼野原となる事などが、この頃、予知できた筈はないのである。

『細雪』には確かに失われ行くものへの愛惜があるが、そこで愛惜されているのは、散りやすい桜のような重子（雪子）と信子（妙子）の娘ざかりであり、また彼女たちと共に過ごす事の出来た時間そのものだった。しかしそれらは、二人の結婚によって、『細雪』執筆以前に既に決定的に失われていたのである。『細雪』の末尾が、日米開戦などではなく、雪子と妙子の結婚であるのはその為である。またそれだからこそ、戦争の帰趨は定かでなくても、この時期に谷崎は、『細雪』の構想を完成し、執筆を始める事が出来たのである。

ところで、この年の六月から十一月まで、谷崎は『きのふけふ』[9]を「文芸春秋」に連載するが、その中には、戦争に対するかなり踏み込んだ発言も含まれていた。だがその部分は、『きのふけふ』が戦後初めて活字になって『谷崎潤一郎随筆選集』第三巻（S26／7）に収録された際に削除され、現在の全集でも復元されていない。

例えば七月号掲載分には、郭沫若に関して次の様な記述があった。

《私事と公事とを混同したり、感傷のために節義を曲げたりすることはよくないけれども、氏の如き東洋の古典に深い造詣のある文学者が、共産党の闘士となつたり、その共産党とも相容れない筈の重慶政権と手を握つてまで日本に楯を突いたりすると云ふのは、一時の物の間違ひであつて、何の（ママ）日にか氏がこれらの総べ

ての過去を清算し、純東洋の詩人たる本来の境地に復る時があるやうな気がするのは、私一人の身勝手な期待であらうか。いや、これは全くのしろうと考へだけれども、その重慶政権にしてからが、近衛原則の確立と大東亜戦争の輝かしい発展を見た今日では、たゞ徒に意地で反抗してゐるだけで、何かのキツカケがあれば、蔣介石も豁然と大悟して昨日の非を悔いるどころか、嘗ての共産党に対する遣り口同様、忽ち矛を倒まにして、英米を向うに廻すのではないであらうか。東条首相の演説でも重慶を「弟」と呼びかけてゐるが、お互に兄弟の国であることが分つてゐながら喧嘩をして、狡猾なる第三者を利することぐらゐ馬鹿げた話はない。》

《狡猾なる第三者》とは、勿論イギリス・アメリカの事である。この削除部分に続く《国と国との間もさうだが、個人と個人との間にしても、此の不自然なる絶交状態が、そんなにいつ迄も続き得るものとは、私には信じられないのである。》以下は、今は単に日中の平和友好を望むという意味に掏替えられているが、元は郭沫若および蔣介石に、一日も早く悔い改めて日本と手を結んでほしいという意味だった。谷崎が、日本の戦争を全面的に肯定していた事は明らかである。

戦時中、「中央公論」編集部にいた黒田秀俊が陸軍報道部の某中佐から聞いた所では、谷崎も《ひところは、対中国工作に一役買わせるべきだと、参謀本部の有力筋にねらわれたこともあった》（前掲『知識人・言論弾圧の記録』）というが、それは『きのふけふ』のこうした発言の結果だった可能性が高い[10]。

十月号掲載分では、映画製作者は画面に出て来る衣食住全般に、細心の注意を払うべきだと述べている所で、次の部分が削除された。

《斯様なことは専門家は疾うに承知のことであらうが、近頃のやうに我が国の映画が共栄圏内の国々へ盛に輸出されて行く時代に於いて、――映画を通じてわれ〳〵日本人の各方面に於ける文化や生活様式を彼等に知らしめる必要のある時代に於いて、此のことは特に一層の深い意義を持つ。顧れば戦前アメリカ式の思想や文化が我が国を始め東亜方面の国々を風靡したか

の観を呈した時代があつたが、あれなども、何もアメリカの優秀なる文学とか高遠なる哲学とかに影響されたのではなくて、主としてアメリカの映画の魅力、それも劇の面白さや俳優の演技の巧妙さよりも、彼等の生活様式の表面的な花やかさに魅せられた結果であることを思へば、今度はそれに代るものとして、我が国土の質実なる淳風美俗と明媚なる山容水色とを普く大東亜の人々の脳裡に印象づけなればならない。(ママ)》

また、これに続く内田吐夢の話の内、《我が国の映画劇を共栄圏内の民衆に親しませようとする場合》という部分の「共栄圏内」を、『随筆選集』では「東洋」、新書版『全集』からは「外国」に書き換えている。これは僅かな変更のようだが、以下の議論の趣旨を、共栄圏内への宣伝の為という本来の論旨から、単に他国民との友好相互理解の為という意味に、総て掏替えてしまう事になる。[11]だから例えば、その儘に残されている《イギリス人は（中略）出先の原住民にまで自国の流儀を押しつけようとするかに見えるが、われ〳〵も少しはさう云ふ図太さを見倣つた方がよい。どんなにわれ〳〵の生活様式が彼等に分りにくいと云つても（中略）是非共分らせて見せると云ふ自信を、われ〳〵自身が先づ持たなければならぬ。（中略）況や相手がわれ〳〵と一脈相通ずるところのある東洋の人々、共栄圏内の民衆[12]であるにおいてをや》という部分も、イギリスのやり方を日本の植民地政策に取り入れよという本来の主張が、読み取りにくくなっている。

また、内田吐夢が、共栄圏内の民衆に特に分かりにくいのは、日本の和洋折衷の生活様式だ、と述べた事に関連して言及される《近頃やかましい国語国字の問題》なるものも、実は共栄圏内への日本語普及政策に関わるものであった事を忘れてはならない。『文芸年鑑　昭和十八年度版』によれば、昭和十七年には、二月に国語協会とカナモジカイが、大東亜圏内の文化建設工作の為に、日本語の初等教科書、各民族語と日本語とを対照させた会話辞典の編纂に着手したり、三月には、情報局・陸軍省・海軍省・文部省などが「対外日本語普及協議会」を開いて、「日本早わかり」のパンフレットを作る、などの事があり、六月には「中央

公論」が、座談会「日本語の海外進出について」を掲載していたのである。

十一月号掲載分（これは削除されなかった）では谷崎は、《近頃文学者の街頭進出の機会が多くなるにつれ、作家は矢張書斎に立て籠つて本来の職域に於いて精進すべきだ、それが結局国家に対しても第一の御奉公になる、と云ふやうな説を強調する人も現れて来た。》として、賛否両論を紹介している。『きのふけふ』では、《これは一般的には孰方がよいとも悪いとも云へない問題で、一人々々の作家について決定すべきものではあるまいか。》と述べ、自らの方針を明らかにする事は避けたが、この秋、丁度『細雪』の執筆を開始していた谷崎は、書斎に立て籠って『細雪』を書き上げる事こそが、自分に出来る国家への最大の御奉公だと考えていた可能性が高い。戦後『細雪』が完成した際、特別の製本をして天皇に献上したのも、そうした考えが背景にあったからであろう。ただしそれは、作品を通じて国民の戦意昂揚を図るという事ではなく、優れた芸術作品を生み出す事が、《国粋文化の（中略）発揚》（S17／7『文楽首の研究』序）になるという意味での奉公だった筈である。

とは言え谷崎も、国民の戦意昂揚には全く協力しなかったという訳でもない。『細雪』の連載が始まった昭和十八年、日本文学報国会が日蓮の辻説法に倣って発案した「建艦」を訴える第一回辻小説の企画に応じて、谷崎は『莫妄想』を執筆している。これは、兄弟の会話の形で、《ルーズベルトの大風呂敷に怯びえたり、奴等の飛行機が成層圏を飛んで来やしないか[13]と恐れたりし》てはいけない事、神風は吹くが、《天照皇大神は、我々が武備に最善の努力を致して、太平洋に敵を圧する戦艦や飛行機を続々と造り出すのをご覧になつてから神風を送つて下さる》のだから、先ず軍備増強に努力すべき事を説いたものであった。『莫妄想』は、辻小説・辻詩の計画を紹介する記事と共に、三月九日の「朝日新聞」（三）面に、原稿の写真版で掲載された。そしてその記事は、《銃後文芸陣にとつては、これが最初の職域奉公だ》として、辻小説・辻詩の原稿料と印税が、すべて建艦献金に廻される事を伝える

ものだった。[14]

ところが、こうした協力にも拘らず、四月に入って『細雪』は、陸軍報道部から「この戦時下に不謹慎極まる」との攻撃を受け、遂に雑誌掲載を禁止されてしまう。この件について谷崎は、敗戦後間もない時期の談話『〝細雪〟と〝聞書抄〟について』[15]（「新生日本」S21／6）で、《私としては、あの作品のどこが悪いのか、どこが反動的なのか、サツパリ様子が判りません。（中略）なにも反動的な思想があつたわけではなく（中略）なにも戦争にさしさわりはないと信じてゐたのですが》と語っている。敗戦後の情勢を考えれば、『細雪』は民主的・反戦的だったから弾圧を受けたのだと主張する方が賢明であった。にも拘らず谷崎は、反戦的意図が無かった事を、一生懸命、弁解したのである。後年の『「細雪」に就いて――創作余談（その一）』（S31）でも、《別に戦争反対の意見を書いてゐるわけではないし（中略）家庭的な話だけを書くぶんには差支へないだらう、と考へて書いた》と、その説明は一貫している。

実際、『細雪』には、谷崎の戦争肯定的立場を反映した部分は幾つかあるが、反戦的な発言はない。例えば、蒔岡家の人々が友達付き合いをするシュトルツ家は、ヒットラー支持のドイツ人であり、キリレンコ家の人々やウロンスキーは、反共主義の白系ロシア人である。上巻（二十四）では、貞之助が、これからの女子は銃後の任務に堪えるように剛健に育てて置かなければならないと考えるし、他にも《今日の非常時に不謹慎である》（中巻一）《時局への認識が足りない》（中巻二）等の表現を、貞之助や妙子が用いる所がある。下巻（二十五）では、幸子がシュトルツ夫人に《独逸の花々しい戦績は親交国民のわれ〳〵としても同慶の至りに堪へない》[16]と書き送るし、下巻（二十六）には、蒔岡家では、貞之助が軍需会社に関係し出してから、家計の方も大分ゆとりが出来るやうになったと語られている。

連載中止後も、谷崎がその儘『細雪』の執筆に専念できたのは、一つには中央公論社の経済的支援の御蔭だが、反戦ないしは反国家的活動をしている訳ではな

いという安心感も、また与かって力あったに違いない。

昭和十八年の谷崎は、この後、八月二十五～七日に開かれた大東亜文学者決戦大会に、参加したらしい[97]。そして、翌昭和十九年七月には、『細雪』上巻を完成し、私家版二百部を出版する。これに対しても警察当局の弾圧はあったが、この私家版には、反戦の意図がないどころか、日中戦争をはっきりと肯定した部分さえあった。既によく知られている事だが、上巻（十七）のキリレンコの家での会話がそれである。水上勉氏の『谷崎先生の書簡』で紹介された昭和二十年九月二十九日付け嶋中雄作宛谷崎書簡に明らかなように、この部分は戦後、ＧＨＱの検閲を恐れて、削除・改変されている。

例えば、現行本文で《何にしても日本と支那とが仲が悪いのは困つたことですよ》となっている貞之助の発言は、この私家版では、《さあ、日本の政治家も何とかしたいのでせうけれども、何しろ支那（ママ）はひどく日本を誤解してゐるのは困つたことですよ》となっていた。また、西安事件に関して、ウロンスキーとキリレンコは、蒋介石と中国共産党の間には密約が交わされていて、《彼等はきつと近いうちに日本に戦争をしかけて来る。多分今年のうち》と語っていた。この場面は、昭和十二年三月前半のお水取の最中という設定であるから、彼等は七月七日に始まる日中戦争を、見事に予見した事になる。恐らくは谷崎自身も、密約説を信じていたのであろう。もっとも貞之助は、蒋介石は《まさか日本と戦争して勝てるとは思つてゐないでせう》、自分の命が助かりたいばかりに《負けるに極まつてゐる戦争に国民を駆り立てるなんて、日本人には考へられない心理だがなあ》と、この時点ではまだ半信半疑であるが、キリレンコは、《英吉利だつて蔭で蒋介石を嗾けてゐるかも知れませんよ。英吉利は共産党は嫌ひですけれども、日本の勢力を支那から追ひ払ふためには、嫌ひなものでも何でも利用します。あの国は滑いですからね。》と言い、カタリナの母も、《世界ぢゆうで一番滑い国、英吉利ごぜえます》《露西亜、今迄何度も〳〵英吉利に欺されました。世界ぢゆうの

国、英吉利に欺されます。》と反英感情を剥き出しにしていたのである。[18]

ここに現われている考え方は、『起てよ、亜細亜』以来の谷崎の戦争観であると同時に、言わば当時の政府の公式見解でもあった。例えば、昭和十六年十二月八日の米国及び英国に対する宣戦布告の詔書では、次の様に述べられている。

《中華民国政府曩ニ帝国ノ真意ヲ解セス濫ニ事ヲ構ヘテ東亜ノ平和ヲ攪乱シ遂ニ帝国ヲシテ干戈ヲ執ルニ至ラシメ茲ニ四年有余ヲ経タリ幸ニ国民政府更新スルアリ帝国ハ之ト善隣ノ誼ヲ結ヒ相提携スルニ至レルモ重慶ニ残存スル政権ハ米英ノ庇蔭ヲ恃ミテ兄弟尚未タ牆ニ相鬩クヲ悛メス米英両国ハ残存政権ヲ支援シテ東亜ノ禍乱ヲ助長シ平和ノ美名ニ匿レテ東洋制覇ノ非望ヲ逞ウセムトス（中略）事既ニ此ニ至ル帝国ハ今ヤ自存自衛ノ為蹶然起ツテ一切ノ障礙ヲ破砕スルノ外ナキナリ》

日本が日中戦争を敢えて「支那事変」と名付け、「戦争」とは呼ばず、宣戦布告さえしなかったのも、戦闘は中国の一部にある排日・抗日運動を止めさせ、真の日中友好関係を打ち立てる為だ、としていたからであった。そうした政府及びジャーナリズムの宣伝を谷崎が鵜呑みにしていた事については、説明の要はあるまい。

昭和十九年から二十年にかけての谷崎は、『細雪』執筆の傍ら、好戦的な歌を幾つか残している。『谷崎潤一郎家集』から拾ってみると、昭和十九年五月五日、永見徳太郎の初孫の初節句に寄せた歌《おほいなる時に生れて菖蒲太刀たゞに佩かんや日本男児は》、同年五月十九日、森田肇出征の国旗に寄せた歌《やすみしつゝ我が大君のしろしめす海の守りに征くかますらを》、また《ますらをは何か恐れん蒼蠅なす醜あめりかの醜のえびす等》《秋空は爆音たかし矛取りてますらたけをの征きたまふ日に》《たくましく戦ふ国の秋なれば都大路にそばの花咲く》[19]が昭和十九年の歌として、《出英利君応詔》[20]と題した歌《美作や神南備山のほとゝぎす雲井にあげよいさぎよき名を》が昭和二十年作として、収録されている。ただし、生前の谷崎は

これらの歌を公表せず、『疎開日記』や『都わすれの記』『歌々板画巻』などからも慎重に取り除いていた。

昭和十九年九月十四日、谷崎は日本文学報国会の事務局長・中村武羅夫に出した返信の中で、《昨今の御職務さだめて御忙しき事なるべく折角邦家のため御健闘を祈居候（中略）御申越の件は単に名儀上の顧問にて宜敷候はゞ差支無之実務之儀は平に御ゆるし被下度小生も発表するしないは別として日〻自己の仕事に精進致居候次第御諒察被下度候》と書いた。《御申越の件》は、日本文学報国会の顧問への就任依頼と推定されるが、名儀上だけなら差支えないと返答したのは、反戦の意志がなかったからである。[21]《自己の仕事に精進》という表現は、『きのふけふ』の《作家は矢張書斎に立て籠つて本来の職域に於いて精進すべきだ》という一節を想い起こさせる。

『細雪』を禁止された谷崎が顧問とは不思議な気もするが、『蓼喰ふ虫』は、皇軍慰問用としてどんどん増刷していた（対談「文芸放談」S21／9「朝日評論」）し、国家総動員法に基づく出版事業令によって設立された日本出版会が、昭和二十年二月四日に第二次非常用文芸図書として決めた十六点の中にも『春琴抄』が入る（大谷晃一『矢部良策と創元社　ある出版人の肖像』）など、谷崎のすべてが否定されていた訳ではなかった。

同年九月二十五日には、土屋計左右に絵葉書を送り、《比島方面や、戦果揚り国民の気分も秋晴れと共に幾分明るく相成候》として、自作の歌《みんなみのはるけき海のた、かひをおもひつ、見る十五夜の月》を記している。

昭和二十年に入って、三月一日付けで土屋計左右に宛てた書簡には、《日本橋三越に愛国百人一首の歌と絵の展覧会あり、大伴旅人の絵を安田靭彦氏、歌を小生書かされ申候（中略）一度御覧被下度候》とある。[22]これは、二月十七日から三月四日まで日本橋の三越本店で開催された日本文学報国会・日本美術報国会共催、毎日新聞社協賛、情報局後援の「愛国百人一首理念昂揚展覧会」の事で、「文芸報国」昭和二十年三月十日記事によれば、《本会（注・日本文学報国会）並

に美報会員中の大家どころに、加へて児玉文相、大達内相、緒方情報局総裁、松村大本営陸軍報道部長その他朝野の名士が、愛国の熱意をこめて、絵に筆に、米英撃滅の意気込みを現しただけあつて仲々の盛況であつた》と言う。

そして敗戦も近い五月十日には、入院中の知人の息子の為に、『大東亜戦記録画集』を買い求めた事が、『疎開日記』に記録されている。

以上、谷崎が敗戦時まで一貫して日本の戦争を正当なものと信じ、勝利を祈っていた事を、ほぼ確認できたと思う。谷崎自身は、戦後の対談「文芸放談」で、記者が《日本の作家で本当に軍国主義者だとか、極端な戦争讃美者なんて人があるでせうか》と訊ねたのに対して、《まあないと思ふな。性格の弱さとか、さういふやうな所から自然とひきずり込まれた。——僕らだつて或る程度さうなんだから、ひとの事は言へないよ。》と答えて、或る程度、戦争讃美に引き摺り込まれた事は認めている。公表されている昭和十九年から二十年に掛けての谷崎の日記からは、連合国への敵意すら全く読み取る事が出来ないが、日付けが飛んでいる箇所が多く、都合の悪い所を伏せて発表した結果と見るべきだろう。[23]

四、『細雪』の中の戦争

以上見て来た事から、『細雪』に反戦的意図が無かった事は明らかだが、逆に戦意昂揚の意図もあり得ない事は、作品を読みさえすれば自ずと明らかである。しかし『細雪』は、《日支事変の起る前年、即ち昭和十一年の秋に始まり、大東亜戦争勃発の年、即ち昭和十六年の春、雪子の結婚を以て終る。》という『上巻原稿第十九章後書』の言葉からも窺える通り、わざわざ戦争下に時代を設定して書かれたものである。もとよりそれは、モデルとなった重子の結婚が、昭和十六年四月である事にもよる。が、もしその気があれば、小説全体をもっと平和な時代へスライドさせる事も出来た筈である。それをそうしなかった以上、谷崎は戦争を、作品の背景として避けようとはしなかったので

ある。だとすれば、『細雪』という作品世界の中で谷崎は、戦争にどの様な意味・役割を持たせようとしたのであろうか。

『細雪』は、その原題『三寒四温』が示していた様に、蒔岡家に交互に訪れる幸福と不幸、光と影を物語りながら、蒔岡家の緩やかな没落と離散の過程を辿る小説である。幸福の側には平穏な日常と、花見・月見・蛍狩・地唄舞・歌舞伎見物・旅行など、種々の華やかな行事があるが、それは『細雪』の片面に過ぎず、その反面で、大小様々の不幸が次々とヒロイン達に降り掛かる。幸子には黄疸・流産、悦子には神経衰弱・猩紅熱、妙子には阪神大水害・板倉の死・赤痢・死産、雪子には顔のシミ・本家と一緒に東京へ行かされる事・思わしい結婚が出来ない事。妙子の巻き起こすスキャンダルも、蒔岡家全体にとっての災難である。作品の最後では、本家はブルーマーの古いのでも何でも頂きますと言い出す程すっかり貧乏になり、妙子はバーテンと結婚して下層階級へ転落する。そして、雪子も結婚を悲しみ、下痢が止まらない所で作品は終わるのである。

谷崎には、『母を恋ふる記』『盲目物語』『猫と庄造と二人のをんな』など、美女が落魄流浪したり、年老いたり、悲惨な最期を遂げたりする作品系列がある[24]が、こうして見ると、『細雪』は明らかにその系譜に連なる作品である。ただ、『細雪』の場合は、降り掛かる不幸が比較的ささやかなものである点に特色がある。大水害や病気や流産はあっても、蒔岡家からは死者は出ないし、本家こそ没落するものの、貞之助一家は最後まで優雅な暮らしを続けている。これは、『細雪』が比較的モデルの現実に近いリアリズム風の現代小説だからであろう。歴史小説でなら、例えば『盲目物語』のお市の方が死んでも、モデルの松子が死んだ様なショックはない。が、『細雪』では、ヒロイン達の不幸が、谷崎の愛するモデル達自身の不幸の様に感じられた為、極端な不幸は避けたのであろう。

従って『細雪』では、戦争はヒロイン達を襲う不幸の一つとして、一応、呼び出されてはいるものの、仲良くしていたシュトルツ一家を帰国させたり、本家の

持ち株の価値を失わせたりする程度の被害しか与えず、戦死者はもとより、出征する親類縁者さえも居ないのである。

『細雪』の中の戦争は、しかし、単に蒔岡家にとって実害がないというだけではない。言及される事すら稀であり、言及される場合にも、どこか遠い世界の出来事という印象しか与えないものとなっている。例えば、昭和十二年七月七日に日中戦争が勃発したという歴史的大事件も、『細雪』の中では、本家の東京への移住が決まり、鶴子が準備に追われる上巻（二十一）辺りに該当する筈だが、そこでは全く触れられず、上巻（二十三）で、本家の東京移住に付き合わされた雪子からの九月八日付けの手紙を読む次の様な場面で、漸くちらりと顔を覗かせるだけなのである。

《幸子が此の手紙を受け取つた日の朝は、関西方面も一夜のうちに秋の空気が感じられる爽かさに変つてゐた。悦子が学校へ出て行つたあとで、彼女は貞之助とさし向ひに食堂の椅子にかけながら、我が艦上機が汕頭と潮州を空襲した記事を読んでゐると、台所で沸かしてゐる珈琲の匂が際立つて香ばしく匂つて来るのに心づいて、突然、「秋やなあ、――」と、新聞の面から顔を上げて、貞之助に云つた。》

戦争は、あくまでも別世界の出来事であり、新聞記事だけが、その消息を伝えて来る。が、それすらも、秋の訪れの爽やかさに比べれば、取るにも足りない些事に過ぎないと、強調されているのである。或いは、戦争は秋空を彩る飛行機雲のイメージへ、見事に景物化されたとも評し得るだろう。開戦は言わば跨ぎ越され、その後の南京占領も武漢三鎮占領も、『細雪』には出て来ない。谷崎は、日本軍の戦果も犠牲も、中国人民の苦難も、共に無視しているのである。

しかし、『細雪』の時代の日本は、実際には戦争一色で、「中央公論」であれ「文芸春秋」であれ、戦争や国際情勢についての論説や座談会が誌面を飾らぬ月は殆どなかった。昭和十三年七月の阪神大水害の際にも、阪神間の御影に住んでいた歌人川田順は、次の様な歌を詠んでいた。《我が家にも水が浸くかと潜山の激戦の日に怖れゐたりき》《戦場の夜寒厳しといふ記

事は水害を免れし吾を衝ちにき》《山津波の土砂軒下にうづだかきこの街よりも今朝は兵発つ》《いつものごと大阪駅に降りしかば今朝の多さよ兵送るこゑ》（歌集『鷲』所収「銃後私帖」）。生活物資の欠乏や贅沢に対する取り締まりや非難も、昭和十三年以降は相当に厳しくなっていた筈だが、『細雪』を読んでいると、さほどにも感じられない。つまり『細雪』は、戦争に関する限り、当時の日本の現実を殆ど反映していないのである。勿論、谷崎が《平安朝の絵巻物から抜け出していらしつたやう》（S11／5／6松子宛潤一郎書簡）と評した三姉妹の雅びな世界を守る為にも、戦争のざわめきを遠ざける事は必要だったに違いない。しかし、『細雪』の中から、ここまで戦争を排除する為には、かなりの勇気と確固たる信念が必要だった筈である。この点で谷崎を大いに励ましたのは、林語堂の『北京の日』だったらしい。

『北京の日』（原題“Moment in Peking”一九三九年刊）は、鶴田知也の訳で昭和十五年一～二月に刊行されており、『続松の木陰』の読後感記載箇所から、谷崎がこれを読んだのは同年四五月頃、『細雪』の構想が固まる以前と推定できる。谷崎は『きのふけふ』（S17／9）の中で、この作品の戦争に対する態度を次の様に紹介していた。

《此の小説に扱はれてゐる四十年間と云ふものは、その間に北清事変、日露戦争、第一次世界大戦、満州事変、支那事変等々の大事件があり（中略）支那としては容易ならない大変動の時代でありながら（中略）人々は大体に於いて（中略）物静かに泰平を楽しんでゐるのである。此の物語の中では、人々が一場の話柄としてゞも政治を談じたり天下国家を論じたりするところが、全然ないと云ふのではないが、殆どない。周囲では世界戦争その他の大事件が起りつゝあるのであるから、それらが此の人々の社会や経済に相当の影響を及ぼしてゐる筈だけれども、さう云ふ影響はあまり表面には現れてもゐず、描かれてもゐない。[26]》

そして、『北京の日』の一節、《北京の古い文化を受けついだ生粋の北京人は（中略）落着いたゆつたりした生活を営んでゐた。（中略）永遠と瞬間とが一致し

たとでも言ふやうな生活、それが北京人の気質や生活の特徴であつた》を引用して、作者は《支那と云ふ国が（中略）歴史の流れを超絶した悠久性を持つてゐることを》理解させようとして、この作品を書いたのかもしれない、と谷崎は結んでいた。

もとより谷崎は、決して『北京の日』を全面的に賞賛している訳ではない。また、事実『北京の日』は優れた作品ではなく、『細雪』とも余り似ていない。しかし、谷崎がこの作品から受けた感銘は深く、読了後六年を経た戦後の対談「文芸放談」（S21／9）でも、記者から戦前と戦後の違いがはっきり作品の上に出て来なくてもいいのかと問われた時、《本当の東洋人の感情は、それでいゝと思ひます、僕は。林語堂の「モメント・イン・ペキン」（中略）にも出て来ないでせう。（中略）僕は本当はさういふもんだらうと思ふ、東洋人の場合は。》と答えた程である。

恐らく谷崎は、『細雪』の三姉妹に《歴史の流れを超絶した悠久性を》与える為には、敢えて戦乱の世の中を背景としながら、しかも少しもその影響を受けない《落着いたゆつたりした生活を営》ませる『北京の日』の行き方が、最も有効であると考え、『細雪』をその方針で貫いたのであろう。

しかし、『北京の日』が『細雪』に与えた影響は、実はそれだけには留まらない。谷崎は、戦後の談話『細雪について』で、《全編に起伏のない、主観を全く出さぬ東洋流のものを書きたかつた》と『細雪』の作意を説明している。[26] ところが谷崎は、『きのふけふ』の中で、林語堂は『北京の日』で、《徹頭徹尾支那の旧い小説の手法を墨守してゐ》る。それは、《作者の主観と云ふものを匂はせないで（中略）平々淡々と叙述して行く純客観の態度である。》《もと〳〵支那の長篇写実小説と云ふものは、日本の源氏物語など、同様、長いわりに事件のヤマや起伏や波瀾重畳と云ふことが少》いが、《その退屈で、同じやうなことが繰り返されるところに、いかにも実際世界の縮図らしい感じがある。》と述べていた。つまり、『細雪』で谷崎が目指したものは、『北京の日』から示唆を受けた支那の旧い長篇写実小説の手法による《東洋流の》作品に他な

らなかったのである。「三寒四温」という中国の気候を表わす言葉が、題名として用意されていたのも、その為であろう。

或いは谷崎は、昭和十七年、『きのふけふ』で共栄圏への宣伝映画について語り、『細雪』の執筆を始めた頃には、この様な書き方こそが東洋芸術の本道であり、共栄圏内の民衆にも共感され、国粋文化の発揚にも繋がるものだと信じていたのかも知れない。が、『北京の日』及び東洋理解の当否に拘らず、『細雪』は芸術的傑作として、美しく成就されたのである。

谷崎の戦争観は、日中戦争及び太平洋戦争を正当なものとして肯定していた。しかし『細雪』は、戦争を背景として呼び出しつつ、超越する事を要求した。谷崎を芸術家として勝利させたのは、彼が作品の芸術的要求に忠実だった事であって、彼の戦争観でも道徳性でもなかったのである。

注

(1) 大正九年十一月のカリフォルニア州排日土地法、大正十～十一年のワシントン海軍軍縮条約と日英同盟破棄なども、多少は影響したかも知れない。『痴人の愛』連載も、排日移民法による世論の激昂で中断されたと私は推定している。拙稿「谷崎潤一郎全集拾遺雑纂」（「甲南女子大学研究紀要」H5／3）参照。

(2) 国松夏紀「谷崎潤一郎とロシア」（「文芸論叢」S63／3）参照。ただし、大正十五年の『青塚氏の話』では、映画は《亜米利加の真似で差支へない、面白くさへありやあいいんだ》と言い、昭和二年の『ドリス』では、《亜米利加と云ふ国では、女の白いしなやかな体を飴細工か粘土のやうに心得てゐるらしい。（中略）それが実に愉快ではないか。》とアメリカに好意的である。谷崎の対欧米感情には、『支那趣味と云ふこと』や『饒舌録』が典型的に示しているように、愛憎の揺れがある。

(3) ただし、谷崎は、反英米感情を強めた後も、ドイツやフランス、就中フランスの芸術に対して好意を持ち続ける。『源氏物語』現代語訳の時も、完成したらフランスへ行くという約束で、松子と重子はフランス語を習っていた（長尾伴七『京の谷崎』及び観世恵美子さんの直話による）。『細雪』で幸子と雪子がフランス語を習っているのは、その反映である。

(4) ただし、こうした谷崎の発言の背後には、『饒舌録』で言及している大正十五年の松島遊廓疑獄事件や、『現代口語文の欠点について』で言及している昭和四年の一

連の疑獄事件など、政党政治の腐敗に対する不信感があった事は、見逃すべきではない。

(5)『乱菊物語』の海龍王が後南朝の天皇の末裔と推定される事については、拙稿「『乱菊物語』論」（「日本近代文学」H5／5）、『吉野葛』の天皇崇拝については、拙稿「谷崎潤一郎研究の現在」（「国文学」H5／12）で、少しだけ触れておいた。

(6)『中央公論社の八十年』によれば、『潤一郎訳源氏物語』は、昭和十四年二月、天皇・皇后・皇太后に献上された。

(7)『シンガポール陥落に際して』は、谷崎の生前は、全集にも単行本にも収録されなかった。なお、南京大虐殺など、皇軍の《不正残虐の事蹟》は、戦後の極東国際軍事裁判まで、一般の日本人には隠されていた。例えば、石川達三の『生きてゐる兵隊』（S13）が発禁になったのも、日本兵の残虐行為を描いた為だった。

(8)市居義彬『谷崎潤一郎の阪神時代』参照。しかし、同書によれば、谷崎は松子が防空訓練に狩り出される事には抵抗した。また、今東光の『毒舌文壇史』によれば、恐らく昭和十五年頃、華北交通会社に入って北京に居た鮎子の夫・竹田龍児を、国家の為に死を賭して踏み留まらせるべきだとする佐藤春夫を押し切って、帰国させた事実もある。つまり谷崎は、自分たちが戦争の犠牲になる事は、一切拒絶しようとしていた訳である。

(9)『きのふけふ』という題は、同時並行的に連載されていた『初昔』が十年程前からの回想であるのに対して、極く最近の事を書くという意味である。内容も昭和十七年三月一日の永井荷風との対面から始まっていて、十一月号掲載分では「文芸春秋」十月号の菊池寛の『話の屑籠』に言及するなど、執筆するにつれて掲載して行ったと推定できる。

(10)『中央公論社の八十年』によれば、黒田秀俊は昭和十三年十月に入社、十六年九月三十日から「中央公論」編集部員となり、十七年十月二十八日から十八年五月二十四日までは、陸軍報道部から南方へ派遣されていた。従って、報道部の中佐から話を聞いたのは、十七年秋頃ではなかったかと想像される。

(11)『文芸年鑑　昭和十八年度版』には、昭和十六年七月、情報局により内田吐夢と田坂具隆が支那事変記録映画編輯責任者とされた事や、昭和十七年九月、《南方に対する文化工作の重要な一部面なる南方映画工作処理について》次官会議で要綱を決定し、情報局が松竹・大映・東宝の一流技術者を総動員して南方向専門の劇映画を作る事になった事、などが出ている。

(12)《、共栄圏内の民衆》は、『谷崎潤一郎随筆選集』第三巻（S26／7）以降、削除されている。なお、本稿に引用した以外にも、九月号と十月号掲載分に削除箇所

がある。

(13) 皮肉にも、昭和十九年から配備されたB29は、高度一万一千四百メートル、即ち成層圏を飛行できる爆撃機であった。

(14) 『莫妄想』は、蓮沼門三・平沼騏一郎の修養団の機関誌「向上」（S18／4）、及び『辻小説集』（S18／7刊）に再録されたが、谷崎の生前は、谷崎の全集にも単行本にも収録されなかった。谷崎は、「莫妄想」を《北条時宗の師であつた禅宗の偉い坊さん》が元寇の際に《時宗の覚悟を促した言葉》としているが、これは「莫煩悩」の誤りで、無学祖元が弘安四年正月にこの三字を書いて時宗に示し、弘安の役を予言したという言い伝えがある。谷崎は小学校時代に愛読した『日本歴史譚』第九篇『相模太郎』辺りから得たうろ覚えの記憶で書いたのではないかと推量するが、確認は出来ていない。なお、戦後の谷崎には、「莫煩悩」の関防印を使用した例がある。

(15) 拙稿「谷崎潤一郎新資料紹介(3)」（「芦屋市谷崎潤一郎記念館ニュース」H8／3）に全文を紹介しておいた。

(16) この言い回しは、時期はずれるが日米開戦後、東条首相が「皇軍は各地に転戦、連戦連勝、まことに御同慶の至りであります」と決まり文句のように述べていた事を踏まえたものだろう。

(17) 「文学報国」昭和十八年九月十日号（三）面に掲載された「第二回大会会議員議席」一覧表の最後に谷崎潤一郎の名前がある。

(18) 現在の『細雪』にも、カタリナには《ヤンキー風なが、さつさが》（上巻十六）ない、女性へのお世辞は《英吉利仕込み》（上巻二十二）、板倉は《亜米利加移民に共通な欠点を持つ粗野な青年》（中巻二十五）など、反英米的言辞が残っている。逆に下巻（三十四）では、御牧は《亜米利加仕込みであるから、レディーに対しては礼儀に厚い》とされる。これは、敗戦の影響であろう。また、スパイ容疑を掛けられるスイス人のボッシュは、元はイギリス人へイウェイだったものを、検閲を恐れて変更した事が、芦屋市谷崎潤一郎記念館が所蔵する昭和二十一年二月六日付け小滝穆宛谷崎書簡によって判る。

(19) 『疎開日記』の昭和十九年九月二十一日、京都の川田順を訪ねた際の記述に《此の辺鋪装道路の路端にソバの畑ありソバの花が咲いてゐる》とあり、この後、間もなく作られたと思われるが、『疎開日記』には記載がない。『疎開日記』に歌が記されているケースはままあるから、この歌は好戦的と見て、削除したのかも知れない。

(20) 出英利は、岡山県津山市出身の哲学者・出隆の次男。野原一夫の『回想太宰治』には、三島由紀夫がただ一度だけ太宰と会った昭和二十二年一月二十六日の会を

準備した人物として登場する。

(21) 谷崎が実際に顧問になったかどうかは確認できていない。

(22) 歌は、『万葉集』巻六の九五六《やすみししわが大王の食す国は大和も此処も同じとぞ念ふ》である。

(23) 『三つの場合』の二「岡さんの場合」に、未発表分の日記を引用した例がある。なお、詳述する余裕がないが、昭和二十年二月二日付け土屋計左右宛書簡に《戦争もこゝ一二年と存候へ共》云々とあり、この頃には、敗戦の近い事を覚悟していたと思われる。

(24) この種の作品の意味については、拙稿「『乱菊物語』論」（「日本近代文学」H5／5）で、若干触れておいた。

25 谷崎は、『北京の日』の続編『嵐の中の木の葉』（一九四一年刊、S26竹内好訳）を読む事はなかったようだが、皮肉な事に、そこには日中戦争下の中国の苦難が描き出され、《われわれ国民は、日本人のやることを見た後では、この海をへだてた隣人を軽んずるだろう。そして（中略）憎しみは忘れられても、ケイベツは決して忘れられない》などと書かれていた。

(26) 昭和二十四年一月三日の「朝日新聞」（大阪版）（四）面に掲載された「朝日賞に輝く業績／美しい風俗絵巻／七ヶ年の労作「細雪」」と題する記事中の談話。拙稿「谷崎潤一郎全集拾遺雑纂」（「甲南女子大学研究紀要」H5／3）で全文を紹介しておいた。